

(65) 芹沢(せりざわ)銅山跡－追追記

少し前、知人の岩友達が本鉾山を目指したという話を聞いた。中三依から芹沢に沿って西に向かっている林道を進んで行った。が、林道の崩壊が激しくて、途中で断念したとか。何年か前のこの地域一帯の集中豪雨で、芹沢が荒れ狂い、林道が至る所で損傷を受けたらしい。近くにある「中ノ沢鉾山」跡の再訪時に、土石流による現地手前の所での沢と山斜面の変容に驚愕したことを思い出した。

岩友達の話の確認、又現地の確認、GPSによる経路ログの獲得のために、10年ぶりに現地へ向かった。紅葉も楽しみとして。が、現地直前まで行き着いたのであるが、坑口跡まで登りつけずに帰還した。坑口を直前にして引き返したのには理由・原因があった。この追記は「探査の失敗」の例として書こうと思う。次に機会があれば、必ず現地に立てると思う。

失敗に至った理由など：

(1) 10年前は図1、2中のC点の所で車を駐車できた。芹沢への入口であるA点からC点まではアスファルト舗装も為された立派な村道そして林道であった。が、今回行ってみると、村道に入って直ぐに村道の補修箇所が目についた。村道に沿って所々に集落があり、集落のあるあたりまでの村道の補修は行われていた。B点より先では林道の補修は全く為されておらず、このB点に今回は駐車した。これより先で所々で林道は崩壊などしており、徒歩で進むのには困難はないが、結構時間がかかった。10年前は現地の「銅山沢」の先まで、殆ど平坦で、トラックも通行可能な幅の林道であったことと比較すると雲泥の差であった。余計な体力の消耗と時間の消耗→気力の減退。

(2) 図中のF点にあった「金山橋」は現存していた。写真4、5を参照のこと。が、その上流で、芹沢から分岐した支流沢「銅山沢」の出会いにかかっていたはずの「銅山橋」の確認に手間取った。橋の形跡が全く無くなっていたのである。後の祭りであったが、「銅山沢」の土石流で、橋の痕跡が完全に消されていたのであった。GPSと既報の探査経路図を宛てに、「銅山沢」らしい箇所を登り上がっていった。が、鉾石の転石をなかなか見つけられず、怪しんでいる最中、計測中のガーミンに表示されている経路ログが、沢を登っているのに、尾根を登っていることになっていることに気がついた。時折、ガーミンが当てにならない経路ログを出すことがあることはわかっていたが、今登っている沢が本当に「銅山沢」なのか不安となった。沢の入口から坑口跡までの標高差(約100m強)は既報のデータからわかっているが、ガーミンの表示データが信用できないこと、沢を登っているのに、尾根を登っているという事実で。また、既報の経路曲線と坑口跡は今では古い自作のGPSでの測地データに基づいたものであり、ある程度の不確かさが免れないこと。これらのことから、この沢を下ることにした。下り、芹沢との出会いから、更に芹沢を少し先に進んでみた。漸くガーミンが正確に測地しているようになったと判断した。それで、出会いまで戻り、荒れ果てている「銅山沢」らしいところを芹沢側から見ると、橋らしいコンクリートブロックが土砂に埋もれているのを見つけた。ガードレールも残っていたが、銘板の付いていると思われる箇所は土砂に深く埋もれて、銘板を確認できなかった。そして、やはり、ここが「銅山沢」であると確信した。が、「銅山沢」を再登坂する気力はもう無かった。帰りの時間も考慮しなければならないので。駐車した地点からここまで来るのに結構時間がかかった。距離で約4km弱。帰路の時間も逆算して、帰還することにした。

2021年11月



図1 中三依地区で、駅の手前のA点で左折し、芹沢に入り、西行して行く。左最上部の赤丸が芹沢銅山跡。10年前にはゲートのあるC点先まで車ででの通行は可能であった。なを、C点では林道の本道は大きく左に曲がり、橋の先へと続いている。橋の手前右側にゲートの付いている側道がある。これに入っていく。C点から現地までの距離は約3 km。数年前の集中豪雨は至る所で芹沢に沿っている村道・林道を崩壊させた。が、現在は、村道は住宅がある所までは修復が行われている。その先は全く修復されておらず、車ででの通行は不能。



図2 図1の部分拡大図。前回はC点にあるゲート直前まで車で進めた。が、今回は林道の崩壊のため、車ででの進行が出来なかったのでB点付近に駐車した。写真1参照。約800mの徒歩時間を要することになった。途中途中で林道が崩壊しているが、二足歩行ならば難しくはない。経路の大部分は幅広の平坦な林道である。D点には立派な橋が残っている。写真2参照。E点では立派な砂防ダムが生きている。写真3参照。

図3、4の中央上部のI点に砂防ダムが記され、その付近まで林道も描かれている。砂防ダムの建設のために切り開かれた林道であろう。従って、資材運搬のためにトラックの通行が出来るようにした。林道は正にその様であった。10年前には、ゲートがなければG点先まで車で行けると判断していた。

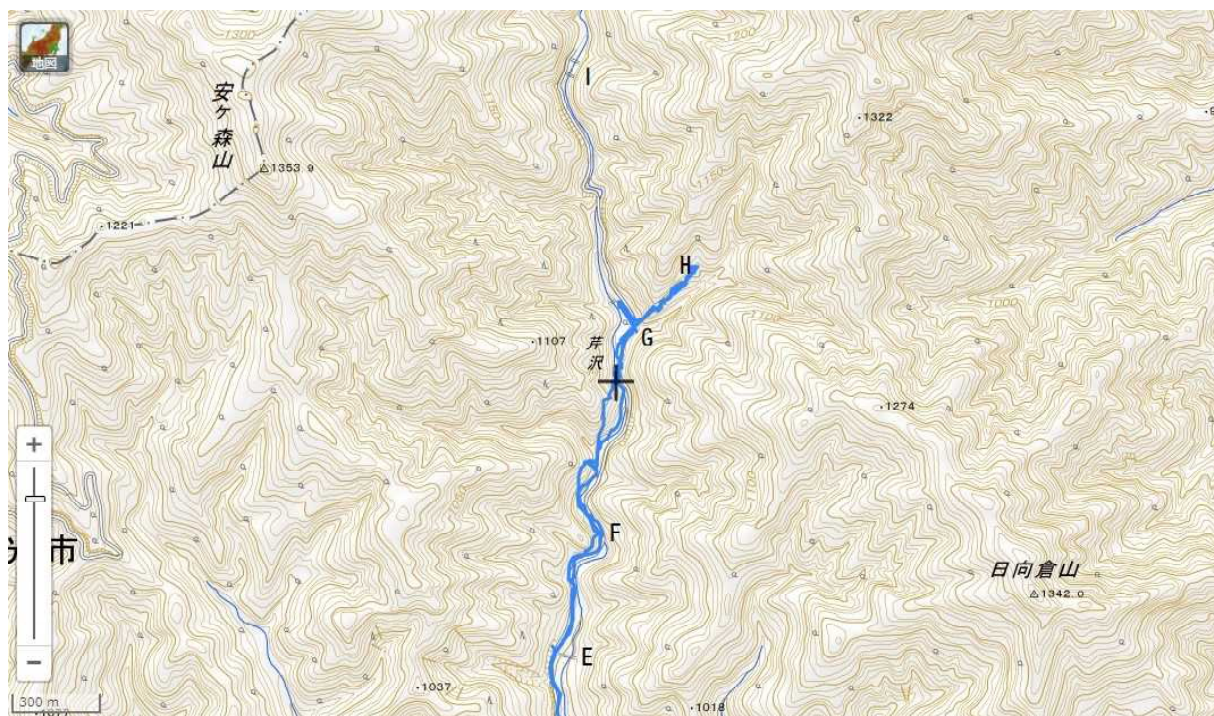


図3 図1の部分拡大図。F点には「赤金橋」が健在であった。写真4，5参照。なを、ガーミンの表示経路曲線が部分的に「真値」とズレていることに留意。G点が「銅山沢」の出会い。H点が今回の最終到達地点。I点は最上流の砂防ダム。この所まで立派な林道が描かれている。



図4 図1の部分拡大図。黒破線で既報での経路曲線を書き加えている。J点の赤輪の所に坑口があった。既報の追記中の図を参照。今回、沢を登っているのにガーミンは水色の線を描き、真値の沢から大きくズレ続けた。不安となり、H点の所で引き返す。というのはこの時点で、この沢が「銅山沢」であるとの確信を持てなかったのだ。よく見ると、それ以前にもガーミンの表示経路曲線に真値とズレていることがわかる。ほぼ林道上を歩いていたのであるが。

鉾山跡写真



写真1 B点の前方の林道の様子。右側の斜面がなだらかに崩れ落ち林道に覆い被さっている。木々が左側に傾斜しているのが見て取れる。地滑りの跡である。ここから徒歩となる。

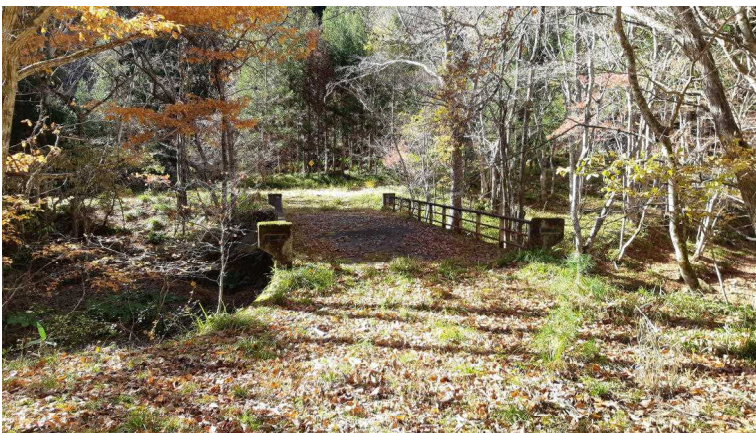


写真2 D点の橋。この橋の名称の確認は忘れてしまった



写真3 E点の所の砂防ダム。



写真4 F点の所の「赤金橋」。左側のガードレール先端に銘板がある。



写真5 「赤金橋」の銘板。



写真6 「銅山沢」手前の林道の様子。来た方向を向いて写真を撮っている。広い林道が生きている。



写真7 「銅山沢」の出会いの現状。その1。林道及び橋、出会い一帯は土石で埋もれてしまった。10年前の沢の出合の形状は全く消えてしまっていた。後になって、この土石の下にコンクリート製の橋の痕跡を確認することとなった。



写真8 「銅山沢」の出会いの現状。その2。「銅山沢」の上流からの土石流が橋だけではなく林道も飲み込んでいた。



写真 9 「銅山沢」の途中で確認した鉄ケーブル。中央部で左右に伸びている黒い線分がそれ。近くに幾本か並んで埋もれているケーブルもあった。

(65) 芹沢(せりざわ)銅山跡

この銅山の存在は古い地形図で八総鉦山を探しているときに、偶然見つけたものである。使用した古地形図は後掲している。この鉦山名はよく利用している「日本地方鉦床誌 関東地方」にはなかった。古地形図と現地形図を対比させ、現地の予想位置を確定させて、探査に出かけた。下の地形図中の左上部にある赤丸の位置が予想した芹沢銅山の位置である。

鬼怒川から121号線を北上していき、五十里(いかり)湖の先の独鈷(どっこ)沢地区へと進んでいく。先方に中三依(なかみより)地区がある。中三依地区に入るあたりに、男鹿川にかかっている芹沢橋が、進行方向左側にある。下の地形図の右下の赤円の当たりである。この橋を渡って、芹沢の舗装されている林道を、西へ西へと進んでいく。芹沢橋から約5 km 当たりで、舗装された林道は左にカーブし、カーブ地点には、直進の未舗装林道が先に伸びている所となる。下の地形図中の左下の赤円の箇所である。現地の道路状況は、地形図とは異なっている。直進林道にはゲートが降りており、一般車の進入を禁止している。未舗装でもある。この所に車を止めて、直進林道を歩こう。地形図の左上の赤丸当たりが、予想した芹沢鉦山の位置である。



右の赤丸当たりで、本線道路から林道へはいる。左下の赤丸当たりから歩くことになる。次の部分拡大地形図を参照。

地図 国土地理院 2万5千分の1 地形図「荒海山+五十里湖」
探査日 2010年 9月

上の地形図では荒すぎるので、拡大した現地の地形図を次に掲載している。車を降り、沢を左下に見ながら、北西方向に歩き始めてから約1 km のところに「栄橋」がある。この橋を渡ってから、右へ曲がり、北へと進む。そのうち、右手に砂防ダムが見える。林道を進んでいくと、「赤金橋」を渡る。赤金は銅の別名でもある。付近で銅が採れることの傍証でもあろう。更に進んで、予想した鉦山あたりに、また橋がある。「銅山橋」である。傍証は確証に変わった。銅山橋当たりを中心に探査を行った。草木が未だ生い茂っている状況だったので、遠くまで見渡すことができなかった。ただ、橋の少し手前の山側が何段かのテラス状となっている林になっていた。大分昔に、鉦山施設があった場所なのかも知れない。しかし、ズリ、坑口跡等は見つけられなかった。

銅山橋のかかっている沢に降りて、転石を探した。それ程困難なく、小さい黄銅鉦粒が散らばっている幾つかの銅鉦石を見つけることができた。品位が高いと思われないものであったが、とにかく銅鉦石を沢で見つけることができた。このあたりは古地形図中の芹沢鉦山の位置にも合致しているので、このあたりに鉦山があったと判断した。が、ズリも坑口跡も見つけていない、草木の枯れた時期に再探査を行おう。



上の地形図の部分拡大



大日本帝国陸地測量部 大正元年測図同四年製版 5万分の1「糸澤」
右上に「越路銅山」名、左上に「八総銅山」名、そして左下に「芹澤銅山」名が見える。



上の古地形図の部分拡大である。中央の沢に右側に鉾山記号と芹澤鉾山の文字が見える。

鉾山跡写真



ここで車を降り、前方に見える林道に入っていく。舗装林道をそのまま進むと、沢を渡り、登りとなっていく。ここで、主林道を切り替えたようである。



赤金橋の欄干である。



銅山橋の欄干である。この橋の下の沢で、銅鉱石を無理なく探し出すことができた。



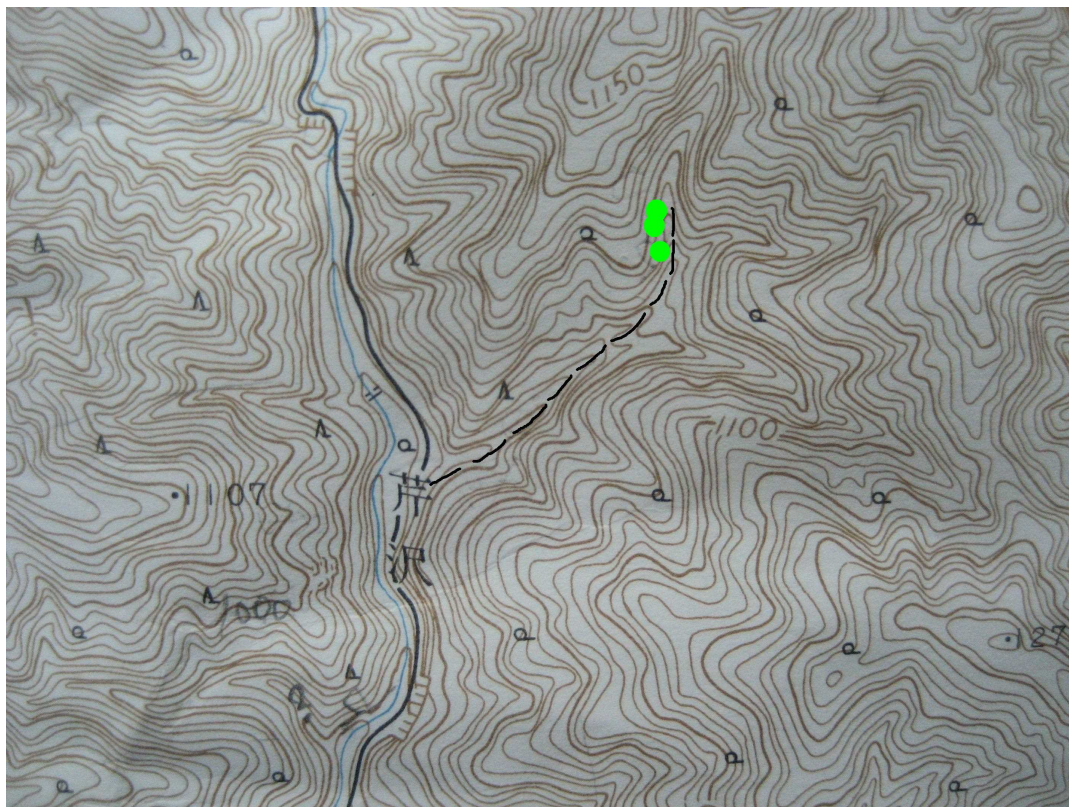
上の銅山橋の所から来た道の方角を見て撮影。正面の林の中は何段かのテラスをとなっている。かつて鉱山施設があった場所なのかも知れない。

採集鉱物写真

沢で銅鉱石を採集できたが、それ程の物ではないので未掲載。この付近に銅山があったと判断した。坑口その他を、未だ見つけていない。見晴らしのきく時期に再探査を行おう。

追記

紅葉も終わって、山の中の見晴らしも良くなってきた。2010年11月下旬に、芹澤鉱山に出かけた。前述の沢の再探査を行った。この沢を、橋の名前から「銅山沢」と呼称しよう。道らしいところはあったり、無かったりであったが、無いところは沢を登ることができる。沢を遡っていくと、所々に結構大きな鉱石の転石があった。黄鉄鉱と思う。この沢の上流に鉱床、坑口があるはずである。古びた長い鉄ロープも沢に残っていた。鉄索で鉱石を降ろしていたのであろうか。登って行って、沢の右岸側に、坑口跡を見つけた。3つほどの潰れかけた坑口が斜めに連続していた。この現場の写真は後掲している。



芹澤鉱山がありそうと判断した部分の地形図の拡大

黄緑丸が3つほどの連続した坑口跡。ほぼ潰れているが、中を覗くことはできる。黒破線は著者が書き入れた大凡の経路である。この経路は難なく登って行けよう。が、鎌やノコギリを持っている方が役に立つであろう。



白いガードは銅山橋の欄干。正面が銅山沢。沢の右側から登っていける。消えかかっているが、道らしい道はある。



沢を登っていく。沢は左右に分岐している。右側の沢の先には滝が見える。坑口跡は左側の沢の先である。



消えかかっている坑口跡。左下から右上へと3つほどの坑口跡があった。殆ど潰れているが、近くによれば、穴となっており、坑口であったことがわかる。



沢の途中で見つけた鉱石の転石。白いところが石英、金属色のところが黄鉄鉱。結構脆い。



沢の途中で見つけた鉍石の転石。白いところが石英、残りの金属色のところが黄鉄鉍。これも結構脆い。

(2010年12月7日筆)